

新獣医学教育への提言

帯広畜産大学獣医学科助講会

はじめに

私たち岐阜大学連合獣医学研究科構成校（帯広畜産大学、岩手大学、東京農工大学、岐阜大学）の4獣医学科獣医学教育検討懇談会は、平成9年6月に「獣医学教育・研究に関する理想像」を作製し、獣医学教育と研究に関する将来像を公表致しました。この冊子の内容は、今読み返してみましても獣医学の置かれている現状を的確に表わしており、十分に現在でも評価できうるものと考えております。ただ、この2年程の間に大学を取り巻く環境は大きく変化し、大学審議会答申（21世紀の大学像と今後の改革方策について）にみられますように大学改革が、社会的要求として求められております。また、獣医学領域におきましても、「獣医学教育に関する基準」（大学基準協会案）として獣医学教育の基準が平成9年に示されました。こうした教育環境のなか、帯広畜産大学獣医学科の若手教官で構成しております獣医学科助講会は、現実的な視点で今一度獣医学教育の全体像について考える機会を得ました。その議論を踏まえ、ここに今回「新獣医学教育への提言」の小冊子としてまとめました。特に本小冊子は、以下のことを考慮し作製いたしました。

本小冊子は、「獣医学教育に関する基準」と「獣医学教育・研究に関する理想像」との3部作としてお読み下さい。

本冊子の内容は、「獣医学教育・研究に関する理想像」の第3章（獣医学部の組織および教育・研究の内容）をより現実的に見直したものであり、当時十分誌論できなかった獣医学教育の内容（カリキュラム）について検討いたしました。

第127回日本獣医学会（平成11年4月2日）に開催されます「わが国の獣医学教育のあり方」シンポジウムの東日本獣医学科の再編整備の参考資料として何かしらの活用の可能性を考え、提言の内容をできるだけ図と表にて表現いたしました。

図と表の理解を計る目的で補足説明文をつけました。

なお、本冊子の内容の多くは未だ検討途中にあり十分なものとは言えません。今後とも検討を加え新獣医学教育の指針となるべきものを作成したく考えております。どうか一読頂きましてご批判頂きますと幸いです。

本冊子の内容

1. 新獣医学教育を考える上での考慮すべき視点 (図1)
2. 獣医学教育の基本目標 (図2)
3. 入学制度と獣医学教育目標 (図3)
4. 獣医学教育の改善方法 (図4)
5. 学年ごとの教育内容とおおまかなカリキュラム (図5と図6、表1)
6. 新獣医学教育を行うのに必要な教育研究組織 (図7)
7. 各獣医学教育研究組織の関係と役割 (図8と図9)
8. 新獣医学教育に必要な要素と将来への期待 (図10と図11)

図表の説明文

図1 新たな獣医学教育を考える上での具体的な視点と対応

新獣医学教育を考える上で考慮しなければならない点や改善すべき問題点についてまとめました。特に獣医学の国際化への対応は、重大な問題であり新獣医学教育を組み立てる意味での原点であり、また到達点でもあります。国際化に向けた教育改善上の課題は2点(臨床教育の強化、公衆衛生学教育の充実)である。この問題の解決点も2点(教育方法の見直し、その教育に必要な教官組織と設備の充実)である。また、他の視点から具体的な課題を考えた時、学部教育だけでは解決しえない諸問題(研究、社会活動など)は大学院獣医学研究科や獣医学教育研究を支援する組織となる全国共同利用センターの検討課題としました。

図2 獣医学教育の基本目標

獣医学教育目標として3つ(獣医師職業教育、動物医全人格教育、科学教育)を掲げ、これらの目標を達成するには教育内容と教育方法の改善が必要と考えました。

図3 入学制度と獣医学教育の目標

獣医学教育を考える上で、まず考えなければならないのはどのような学生を就学対象者とするかです。また少子化が深刻化する将来において能力ある人材を広く集め魅力ある学問分野を確立する為にも、多様な入試制度を導入しなければなりません。高等学校の卒業者のみならず、社会人入学制度も積極的に取り入れ目的意識を持った学生集団を作る必要があります。また、今後の国際化を考慮し留学生を学部1年生から若干名受け入れるのも良策かと考えます。図3は、図2で示した3つの教育目標がどのような段階

を経て教育されていくかを示しております。

図4 獣医学教育の改善方法

教育方法を従来の「知識の供与型教育」から「問題解決型の教育」へ変革する必要がある。チュートリアル教育の導入もその1方法かと考えます。諸外国で行われている獣医学教育方法を参照し、日本の教育環境に合った教育方法を構築する必要があります。

図5 学年ごとの獣医学教育内容

臨床教育の強化と公衆衛生学教育の充実を計るためのポイントを示しました。

1. 基礎教育科目と臨床教育科目の相互乗り入れ。

基礎および臨床教育科目で授業内容及び授業項目を同期化する。

基礎教育科目を各々基礎総論と臨床的各論に分け、基礎総論は学部2年で、臨床的各論は、臓器別臨床教育のなかで教授する。

例：解剖学 解剖学総論と臨床解剖学；薬理学 基礎薬理学と臨床薬理学

2. 受け入れ学生の学力に応じた教育科目の設定。特に学部1年と6年に大学外研修科目を設定し、社会での体験学習を行い単位を認定する。また、他学部の関連授業科目に対し単位の互換性を考慮する。

3. 臨床教育と公衆衛生学教育に重点を置くが、臨床教育は学年に応じてコア科目を設けて組み立て、公衆衛生学は臨床教育の延長線上の応用総合科学として位置付ける。学部5年時で齊一授業科目をほぼ修了する。

4. 学部6年前期は、臨床教育の総合演習にあて小グループによる臨床活動を体験させ将来の進路に応じたコース分け教育を行う。また、進学希望者に対する科学教育の基礎を教授する。卒業論文は行うが、負担は現在より軽くする。

図5は各年度ごとの主な授業科目と授業目標を示した。学部1年は一般授業科目を学部2年は基礎獣医教育科目を示している。

図6 新獣医学教育カリキュラムの概要

6年間で教育する授業科目の概要を大まかに色分けした。一般教養科目は学部1年と2年で、獣医基礎教育科目は学部2年で、獣医齊一教育科目は学部3年、4年、5年で、獣医専修教育は学部6年で教授する。

表1 各学年度の教育授業科目（一試案）

各学年ごとに受ける教育授業科目の一例を表1に示した。総単位数は、基準協会案の182単位以上であり、医学部授業単位（186単位）以上を目標としているが、ゆとりのある教育を行うためできるだけ単位数は少なめにし、中味の濃い授業内容を心がける。各授業科目の内容については、シラバスを作製し授業内容を明らかにして

各授業科目間の内容を調製する。

図7 新獣医学部の教育研究組織の一試案

新獣医学教育カリキュラムを行うのに必要な獣医学部の教育研究組織の一例を図7に示した。本組織の教官数は、岐阜大学連合大学院参加4校の現有教官数に基づいている。獣医臨床センター（家畜病院）と先端的动物研究センターは、大学基準協会案では獣医学部付属のセンターとして位置付け、教授を各々2名置くようになっているが、研究の独創性や先端性を重視しかつ卒業教育などを考慮した組織として機能する為には、先端的动物研究センターを全国共同利用センターとして位置付けた方が良いと考え、獣医学部外のセンターとして組織した。従って、新獣医学部の組織は、3講座（臨床獣医学講座、生体防御学講座、基礎獣医学講座）と1センターからなる。各講座を構成する教室の名称や配置教官数については今後検討する必要がある。

図8 教官の教育・研究分担

獣医学教育・研究に関する各組織の関係や教育・研究分担について図8に示した。獣医学部の教育研究は、獣医学部に属する教官が中心に行うが、全国共同利用センターに属する教官も併任発令により獣医学部教育研究を支援する。大学院獣医学研究科に所属する教官も兼務（兼任）により獣医学部研究教育をサポートする。獣医臨床センター（家畜病院）の診療業務に関しては、学部所属の臨床獣医学講座に所属する教官が兼務する形で参加する。どの組織においても任期制を導入し、人事の交流を盛んにするとともに教育と研究の活性化に勤める。獣医臨床センターと全国共同利用センターでは獣医師の研修生制度を導入し、次世代のリーダー層を育成するとともに学部教育と大学院教育の人的支援を確保する。

図9 獣医学教育・研究支援組織の構成

大学での学部（学部教育と大学院教育）とそれを取り巻く社会教育活動（卒業・生涯教育）の関係について図9に示した。獣医臨床センターは、獣医学部の社会との窓口として機能し、全国共同利用センターと共に卒業・生涯教育を行う。大学および学部付属の各組織は、学内外および諸外国との「教育研究プロジェクト」に積極的に参加し学術の進歩と社会貢献に勤める。特に国際協力に関する大きなプロジェクトは、学内にプロジェクト委員会を設けてプロジェクトの実施に当たる。獣医学部、大学院獣医学研究科および全国共同利用センターの教育研究の自己点検・自己評価に関しては、大学運営協議会（獣医学部門）を大学外に設けて行い社会的要請に敏感に答える。

図10 各種要求に対する新獣医学教育研究の対応

獣医学に対する学術的あるいは社会的要請に答え、さらには国際化に対応できる新獣医学教育研究体制を確立するためには、少なくとも3つの大きな支援（教育研究教

官数の確保、施設、設備の充実と確保、医学部や農学部など獣医学領域を支援する教育研究支援組織の確保)が必要である。この3つの支援の柱があって、はじめて教育研究システムの開発および教育研究方法の改善ができ、質の高い新獣医学教育研究が可能となる。

図 1 1 新獣医学教育研究への期待

これからの獣医学に期待されている分野や項目を図 1 1 に示した。この貢献項目は獣医学のみが負っているものではなく多くの学問分野がこれからの将来を考える上で背負わなければならない課題である。なかでも獣医学は、どの分野にでも勇気と自信を持って参加し貢献できる学問として期待されよう。